
俺たちの不快紙数

ぐろわ姉妹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

俺たちの不快紙数

【Nコード】

N0651B

【作者名】

ぐろわ姉妹

【あらすじ】

彼氏のユウくんには、手紙で会話をする女子高生のツグミちゃん。ちょっと焦点のずれた彼女に振り回される、ユウくんの泥沼ラブストーリー。

(前書き)

これは「紙」企画の参加作品です。
キーワード「紙小説」で他の方の作品も検索できます。

俺たちの不快紙数

『だって恥ずかしいんだもん！』

ツグミちゃんは駄々をこねながら可愛らしくぷつぷつと膨れて、そう叫んだ。……多分。

多分そうだろ。「だもん！」って「もん」にビックリマークがついてるんだしさ……。

俺は顔を上げて小さく溜め息を吐いた。

ツグミちゃんは俺の彼女。

俺といっさい口をきいてくれない、そんな彼女。

俺はいつつ、ツグミちゃんの書いた文字とにらみ合いながら、彼女のことを推測しつつ毎日を過ごしている。

(やきもきするんだよな、こつこつ…)

同じ中学出身のツグミちゃんが俺の彼女になったのは、ついこの間。二学期の初めごろだった。

一度だけ同じクラスだったこともあるけど、高校最後のこの年にまた同じクラスになれるなんて思ってなかった。

一学期には席も近くなったりしたりしたから結構話したりもしたし……、そのおかげでクラスのヤツラと一緒に夏休みにも何度か遊んだりしてさ。

俺が冗談言ったりするとすげえ笑ってくれるいい子なんだ、ツグミちゃん。

…そうやって間近でツグミちゃん見てたらなんか…俺の想いがぶり返したっていうか……。
好きだったんだ、ずっと。だから俺から告白した。付き合ってくれって。

そしたらツグミちゃん、にこってはにかんで、

「うん」

って言うてくれた。

あーあ、思えばあれが最後だなあ。ツグミちゃんと話したの。付き合い始めたたん、ツグミちゃんはぼったり喋らなくなった。それも俺だけにだ。

そして事あることに…いや、事がなくても…、ツグミちゃんは手紙を渡してくるようになった。

バッチリ手紙の時もあれば、すげえメモ書きの時もある。

とにかく会話すべてが紙なんだ。

並んで歩いてても、俺が話しかけたらすぐさまメモで返してくる。

『うん、そうだね！』

って、そんなことでもメモで返してくる。

こんなのおかしいでしょ？ 付き合ってるのにさ。いや、付き合ってるなくてもおかしいよ。

だから俺聞いたの。

「どうして俺と喋ってくれないの、ツグミちゃん。俺、なにか悪いことした？ 俺のこと嫌い？」

真っ赤になったツグミちゃんは小刻みに首を横に振って、一生懸命

命にメモ帳にペンを走らせる。

書き終えたあと、彼女がびりっと破り取って俺に押しつけたその紙にはこう書いてあった。

『うっん、好き、大好き！ 私、ユウくん大好きだよ！ 大好きだから手紙で書くのっ！』

すんげえ、かわいい字。

俺、思わずにやけちゃった。危うく「それなら、いっかあ」なんて思うところだった。

……よくないよ。

どうして？ どうして、大好きだと手紙なんだ？ 訳わからん。

顔を上げてみると、俺のそんな気持ちを察してかツグミちゃんはまたメモを渡してきた。

『ユウくんには私の言葉、ぜんぶぜんぶ取っておいてほしいの。忘れないでほしいの。ダメ？』

うああ、ツグミちゃん……。

ぐつと来たよ。

俺、ぐつと来た。

いいよオーケー、ドンと来いだ！ 君の言うこと何ひとつ忘れるもんか！

そう思ってしまった俺はツグミちゃんの気持ちをおもんばかり、彼女の言い分を通してあげることにした。

それがどんなに馬鹿な決断だったかも知らずに。

その決断のせいで俺は、毎日毎日彼女の手紙と戦うことになった。一日を終え帰宅するころには、カバンはパンパンだ。だつてもともとツグミちゃんはおしゃべりな子なんだ。それをぜんぶ手紙にしてくるんだから、俺のポケットというポケットはいつでもモリモリだった。

どうして携帯はびこるこの時代にメールじゃないんだ、ツグミちゃん。

その問いに対する返事はこう。

『手紙はメールより想いを伝えるんだよ』

「そう…ですか……」

きょうも俺は教室で、自分の席に座りながら彼女の手紙を読む。休み時間にもなれば、聞こえてくるのはクラスメイトのおしゃべり。

すぐ隣にはツグミちゃんの声もある。

ツグミちゃんはべったりと俺に寄りそいながら、いつつも別のヤツと喋ってる。

女子だろうが男子だろうが仲良く喋ってる。

「…なんで他の男はツグミちゃんと話せて、彼氏である俺が話せないんだよ」

まだ三時限目が終わったばかりだというのに、もう机の中であふれるツグミちゃんの手紙。

それをきれいに折りたたみながら、俺はありったけの精力をかけ

てクラスの男子を恨んでいた。

あのころが懐かしいんだ、ばかやろっ。

そんな俺を無邪気にのぞき込んでくるツグミちゃん。

くりくりの目が、きらきらだ。

そんな表情までするくせに俺と喋ってくれないなんて、これ何かのお仕置きなの？

今じゃ俺が手紙まみれになってることなんか、誰も気にしてくれないのが虚しいんですけど。

俺の口からは思わず溜め息が出た。

「…はあ…ツグミちゃん。やっぱり俺とも口きいてよ」

『いやだ』

「いいでしょ？ 俺、絶対忘れないからさ。ツグミちゃんの言うのと、ぜんぶ覚えておくからさ」

『い・や・だ・っ』

俺はできそつもない約束を口にしながら、ツグミちゃんのペン先を目で追う。

いいかげん慣れた言えば慣れたけど…、このまどろっこしさ、まるでコツクリさんでもやってるみたいだよ。

「だってねえ、ツグミちゃん……」

『なあに？』

「俺たちこのままじゃさあ……」

俺は最近ずっと考えていた事を口にしようかどうか迷った。
突然にクラスの女子が言う。

「あなたたちさあ、そのまま行くわけえ？」

「え？」

きよとんとしたツグミちゃん。舐めかけのチュッパチャプスを振り回しながら、その女子が続ける。

「ケツコン生活どうすんの？ 成り立たなくなーい？」

俺は思わず椅子から立ち上がった。

そう、そうなんです、ツグミちゃん。この女子の言うとおり！
今から結婚なんて飛躍しすぎだけど、俺は本気でそれに悩んでるんです！

俺たちこの先どうなっちゃうんですか？

ツグミちゃん、この先のこと考えてくれます？

「エッチン時どうしてんのー？」

「ガウッ！」

ええい、無粋ながらも的確な女子め。

ああそうさ、問題はそこだよ！ 俺たちはまだなんだよ！

吠えたところで問題は消えないんだけど、俺はやっきになって吠えていた。

気づくと、真っ赤になったツグミちゃんがなにやら殴り書いている。

『しないもん!』

「えええっ!」

あっさり振られた俺をチユツパチャプスが笑う。

どっちをしてくれないんだ、結婚か、エッチか!?

「なんで! ツグミちゃん、なんでっ!」

「ツグミはあんたみたいな、エロ男が嫌いなんだよ。ねー、ツグミー」

エロって、俺まだ何もしてないのに?

呆然とする俺をよそに、ツグミちゃんはガリガリと書き続ける。

『嫌いじゃない、嫌いじゃないけどお……』

「えー、じゃあなんでしないのよ?」

『そ、それは……』

「もういいだろ、ツグミちゃんにそんなこと聞くなよ!」

「ユウは黙っててよ、関係ないでしょ、あたしが聞きたいの!」

関係あるよ!

何か言われて傷つくの俺なんだぞ!

見る、ツグミちゃんだって混乱して、お前にまで文字で会話しちやってるじゃないか!

俺はもう、ツグミちゃんの手元を見ることができなかった。
アメを舐めながら喋る声だけが耳に届く。

「えー？ ……ふーん、そうなんだ。けどさー、だいたい何で喋ってあげないのよー？ 割とユウってカワイソウくない？」

おい、やめろよお。座り込んでまで、なに聞いてんだよ。
俺はおろおろしながら無駄に天井なんか目走らせた。
急にチュツパチャプスが笑い出し、俺の肩を思いきり叩いて去っていく。

「まー！ がんばれよ、ユウ！」

「な、なん、なんだよっ！ 何がわかったんだ！」

俺がツグミちゃんを振り返ると、広げられたノートにはびっしりと文字が並んでいて、ひときわ大きな文字で書かれた、

『だって恥ずかしいんだもん！』

の一文だけが見て取れた。

慌てて隠したツグミちゃんがうかがうように俺を見上げる。

チュツパチャプスの「あいつらバカだよ、バカ！」という声が遠くから聞こえていた。

「…ツグミちゃん……」

ツグミちゃんは駄々をこねながら可愛らしくぷつぷつと膨れて…、
そう叫んだ…んだ……。よね…？

「……」

「……」

ツグミちゃん。

俺、思っただよ。

確かに手紙はメールより想いを伝えると思う。

でもさあ……、声は手紙よりももっと想いを伝えるんじゃないかなあ。

君が喋ってくれたら俺、もっと君のことが解る気がする。

だって、付き合う前の方が解ってた気がするんだ。

…けどこの想い、俺はどうやって伝えればいい？

多分ツグミちゃんは俺のこと嫌いじゃないんだろう。

でも今話しかけてまた文字で返ってきたら、なんか…すごくへこみそうだよ。

俺はツグミちゃんと見つめあいながら、何を喋っていいか解らなかつた。

言いたい事ありげな目のツグミちゃんに、情けないほど小さな溜め息がひとつ漏れる。

「ツグミちゃん…」

不快指数。

それが80以上になった時、すべての人が不快を感じるのだという。

俺、君から毎日、80なんか軽く超える数の手紙もらって混乱す

る一方なんだよね。

……でもとりあえず、俺も便せん買いに行くわ……。
だってメールよりは手紙……。なんだろ？

君がそのつぐんだ口を開いてくれるまで、俺も自分の想いを手紙に託すことにする。

また喋って欲しい。

そのかわいい声で、俺を呼んで欲しい。

『大好きだよ、ツグミちゃんっ』

(後書き)

この話は一応これで終わっています。

ですが完結編として、オマケストーリー「俺たちの不快紙数2」へと続いています。

下部にリンクがありますので、よろしかったらご覧くださいませ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0651b/>

俺たちの不快紙数

2008年8月29日17時09分発行